



武器を盗む

- ミノウミウシの盗刺胞 -

暑くなってきました。海水温も時折 25 を越えるようになり、そろそろ海の中は夏のような感じです。研究所には、しばしば変わった生き物が持ち込まれてきますが、季節も関係するのでしょうか、最近も立て続けに2つの生き物が来ました。今回は、この生き物たちを紹介しましょう。

1つは、電気クラゲの異名を持つ「カツオノエボシ」です。以前にもアムスルだより (No.60) で紹介したことがあるので、覚えている人もいるかもしれませんが。このクラゲは、風船みたいなもの(役割から言うと浮き袋)の下に、時には数 m にもなる青い触手を伸ばしていて、その姿は奇妙きみょうでしかも美



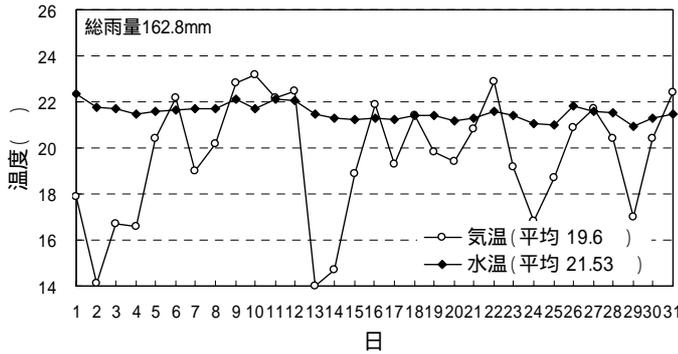
カツオノエボシ

しく、つい触りたくなりますが、異名のとおり刺されると電気ショックのように痛いので、絶対にさわってはいけません。カツオノエボシという名前は、その烏帽子えぼしのような姿と、関東地方でカツオが獲れるようになる初夏のころ沿岸にやってくることからついたようです。慶良間の海では冬の12月ごろから見かけることがあります。今回この生き物が研究所に持ち込まれたのは5月2日でした。座間味のダイビングサービス JOYJOY の中村さんが持ってきてくれました。海の中のものや海岸に打ち上げられたものは何度か見たことがあったのですが、“活きのいい”カツオノエボシをじっくりと見たのは初めてでした。風船(気泡体といいますが)の下の触手もぞもぞと動くだけでなく、風船自体も身をよじるように動きます。「なるほどこの部分もちゃんと生き物だな」と驚かされました。

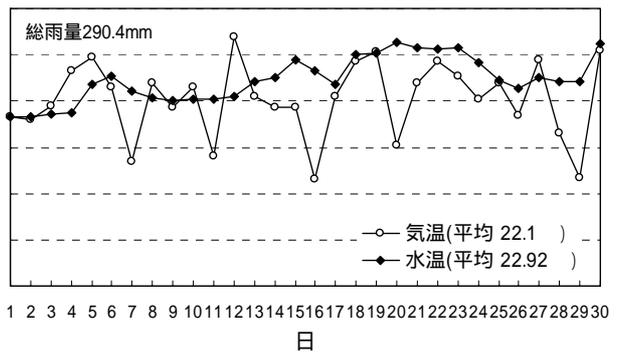
さて、もう1つの生き物は、まずその姿(冒頭の写真)を見てもらいましょう。いったいなんなのでしょう。つばさを広げた鳥のようにも見えますが、海の生き物です。宇宙から来た怪獣のようにも見えますね。この生き物、名前はアオミノウミウシといいますが、大きさは1cmくらいでした。その名のとおりウミウシの仲間です。5月3日に阿嘉のエル・アスールの阿部さんが持ってきてくれました。ふつうウミウシの仲間は、海底をゆっくりとはい回ってくらしていますが、このアオミノウミウシは変わり者で、体の中に空気をためて海面に浮いています。しばらく観察してみましたが、自分で泳ぐとか積極的に海面をはうという動きは見られませんでしたか

定点観測

2006年 3月



2006年 4月



ら、きっと流れとともに漂いながらくらしているのでしょう。

写真のとおりアオミノウミウシには、鳥の羽のような突起がたくさんあります。実は、この種にだけではなく、海底をはい回る他のミノウミウシの仲間にもあり、これが名前の“みの”の由来です(みの=蓑:ワラやカヤを編んで作った雨具)。このみのは、ただの突起ではありません。いくつか役割や特徴があるのですが、もっとも不思議なのは、この突起の先端には小さな毒針が仕込まれていて、敵を刺すことができるということです。みなさんも知っているとおり、海の中にはほかに毒針を持った生き物はたくさんいますから特別に不思議なことのように思えないかもしれませんが、実はミノウミウシの毒針は、自分で作り出したものではなく、ほかの動物が作り出したものを、扎扎实り自分のものにして使っているのです。毒針のもとの持ち主は、イソギンチャクなどの刺胞動物しほうです。アムスルだよりでも何度も紹介してきましたが、この刺胞動物の仲間は刺胞という毒針をもっています。そしてミノウミウシは、この刺胞動物を餌にしている、しかも食べたときに刺胞動物の未発射の刺胞を取り込み、みのはの先に移動させて自分の武器として用いるのです(このことを「盗刺胞」と呼ぶことがあります)。これは、刺胞というもともと違う生き物の細胞を自分の体内で生かしながら利用するので、臓器移植どころではない、大変なことです。ミノウミウシたちは、小さな体の中で、そんな不思議なことを平然と行っ

ているのです。

ところで、アオミノウミウシは、何を食べているのでしょうか。ミノウミウシの仲間ですから、きっと刺胞動物を食べるのでしょうか、それはいったいなんなのでしょう。実は、アオミノウミウシの餌は、カツオノエボシです。きっと風や潮にのって漂いながらくらすカツオノエボシの生活に、アオミノウミウシが合わせるようになったのでしょうか、両方とも同じような漂流者です。もう気づいている人もいでしょうが、今回のカツオノエボシとアオミノウミウシは、ほとんど同時に(1日違い)研究所に持ち込まれてきました。おそらく同じ流れの中で漂ってきたのだと思います。けれど、強烈な毒をもつカツオノエボシにさわって、アオミノウミウシはどうして大丈夫なのでしょう。また、不思議なことが一つ増えました。

阿嘉島の海より

今年もサンゴの産卵の季節がやってきました。海水温も順調に上がり、5月に入ってから25以上の日が続いています。サンゴが産卵するには十分な水温なのですが、肝心の卵の成熟の方が遅れているようです。5月は満月の数日後に一部は産卵すると思いますが、全体(この時期に産卵する種のうち)の1割以下でしょう。そして大部分は6月の満月前後になりそうです。

オニヒトデの異常発生で阿嘉島周辺のサンゴも年々減ってきて、産卵するサンゴを探すのも大変になってきました。